

高 2 難関大 国語



は、)「ではあえて質問致します、どのような人物なら狂者と言えるのでしょうか」と。(孟子が答えて言うには、「琴張や曾皙や牧皮のような人物は孔子の言われる狂者と言えるだろう」と。(万章が尋ねて言うには、「どういう訳で彼らを狂者と言われるのでしょうか」と。(孟子が答えて言うには、「(彼らは) 志や言うことが大きく、(口を開けば) 『古人が、古人が』と言うが、彼らの行動を平心にかんがみると、発言したとおりに(行動が) うまくいっていない者たちなのだ。(ところが、このような) 狂者でさえもまたなかなか見出すことができない。(だから、せめて) 不正を潔しとしない者たちを見出して、彼らとともに行動しようと思われたのだ。それが(つまり) 獯者であり、狂者の) また次の段階の人物なのである」と。

解答

問1 ④

問2 孔子がどうして中庸を得た人物を求めないことがあるのか、いや求めている。

問3 C || 孟子 D || 狂者

問4 獯者

問5 中道・狂者・獯者

出典：『韓詩外伝』／ 國學院大学・経済学部

書き下し文

齊せいの桓公かんこう管仲かんちゆうに問とひて曰いわく、「王者おうじやは何なにをか貴たつとぶ」と。管仲かんちゆう曰いわく、「天てんを貴たつとぶ」と。桓公かんこう仰あおぎて天てんを視みる。管仲かんちゆう曰いわく、「所謂いわゆる天てんは、蒼蒼そうそうの天てんに非あらざるなり。王者おうじやは百姓ひやくせいを以もつて天てんと為なす。百姓ひやくせい之これに与くみすれば則すなわち安やすく、之これを輔たすくれば則すなわち王者おうじや強つよし、之これを非ひとすれば則すなわち危あやふく、之これに倍そむけば則すなわち王者おうじや亡ほろぶ」と。

現代語訳

齊の桓公が管仲に尋ねて言った、「君主はどんなものを大切にするのか」と。管仲が答えて言った、「天を大切にします」と。(そこで)桓公は上を向いて天空を見た。(すると)管仲が言った、「私の言う天は、青空の天のことではありません。君主は人民を天と考えるのです。人民が君主に味方すると(その王者は)安泰であり、(人民が)君主を補佐すると君主は強いのです。(それに対して、人民が)君主を是認しないと(君主の)地位は危うく、(人民が)君主に背くと王者は亡んでしまうのです」と。

解答

問 1 (1) ≡ (オ) (2) ≡ (イ)

問 2 A ≡ (エ) B ≡ (エ) C ≡ (ア) D ≡ (ア)

問 3 (ウ) 問 4 (c) ≡ (ウ) (e) ≡ (オ)

問 5 (d) ≡ (ア) (f) ≡ (ア)

問1 現代語訳と書き下し文を問う問題。ポイントとなるのは「何」と「貴」である。

「何」は「誰（だれ）」以外の疑問の意味をほとんど持つ疑問詞である。おもに、

「なんゾ」 …… どうして
「なにヲカ」 …… 何を
「いづくニカ」 …… どこに
「いづレカ」 …… (XとYのうち) どちらが

と四通りの読み方を持つ。また「いつ」の意も表すこともあり、この場合は、「何（いつレ）時（とき）」「何（いつレノヒ）日」のように直下に他の語を必要とする。

そこでこの四つのうち、(a)にふさわしいものを選ぶことになる。(a)は、斉の桓公の宰相管仲に対する問い〔Ⅱ下問〕である。この後に、この問いに、空欄Aの人物〔Ⅱ管仲〕が「貴（天）」と答えている。ここで、「天ヲ」と、目的語を答えていることに着眼しよう。

ここから、(a)は、「天」という目的語を問う形であることがわかる。すると、理由を尋ねる「なんゾ」、「どこにくか」と補語を尋ねる「いづくニカ」は消せる。また、「いづレカ」は、「(XとYのうち) どちらが」という意味を表し、(a)にはXとYにあたる選択肢がないから該当しない。したがって、「なにヲカ」と読んで、「何を」と尋ねているのが適切である。

目的語を尋ねる場合、疑問詞の位置は、(a)を例に考えれば、「王者貴（たう）何（な）ヲカ」というようにならず、「王者何（な）貴（たう）」というように、動詞の上に来るのである。

「貴」は、「天ヲ」という目的語を取ることから、動詞とわかる。動詞の「貴」は、「たつとブ」と読み、「大切にする」の意味を表す。

したがって正解となる選択肢は、(1)では(オ)、(2)では(イ)となる。(1)の場合、(ア・ウ・エ)は、「何」を疑問詞として訳していない。

(2)の場合、「何」が「疑問」を表すということから選んでも、(イ)しかない。(ア)は文末が「んや」であるので反語。(ウ)は疑問文になっていないので論外。

問2 動作、発言をした人物を問う問題。このような問題では、まず、地の文に出てくる人物と、会話文に出てくる人物とを整理する。

ただし、この問題の場合、地の文では、斉の桓公と宰相管仲しか出てこないの、かなり簡単である。

Aは、地の文で、桓公の管仲への問いに答えている人物だから、「管仲」。

Bは、桓公の「仰而視^レ天」という行動に対して、「所謂天、非^二蒼莽^一之天^一也」と言っている人物だから、桓公以外の「管仲」しかない。

CとDは共に会話文中のものだから、特定の人物を指すものではないとわかる。そこで(イ)「桓公」と(エ)「管仲」は消える。後は、発言の内容から判断する。CとDは、AとBに該当する人物、すなわち「管仲」の発言に出てくる。だから、「管仲」の発言を通して、彼の言いたいことをまとめればよい。管仲は最初に「(王者は)天を貴ぶ」と言い、その後、傍線部(b)のように、「君主(王者)は人民(百姓)を天と考える(↑問3の設問文参照)」と言っているのだから、つまり、管仲は、「王者は百姓を貴ぶ」と言いたいのである。そして、この後の管仲の言葉には、次のような対比関係が見られる。

「百姓与^レ之」―則↓「安」、「(百姓)輔^レ之」―則↓「C」強、
「(百姓)非^レ之」―則↓「危」、「(百姓)倍^レ之」―則↓「D」亡。

したがって、CやDには、「百姓を貴ぶ」の主体であり、「百姓」と対比されている、(ア)「王者」が入ると考えられる。

問3 白文に返り点を付ける問題。この場合は、現代語訳が提示されているので、かなり簡単。

「XをYと考える」という構文は、「以^レX^ヲ為^レY^ト」である。これは「Xを以てYと為す」と読む。したがって、この順序に従って返り点を付せばよい。本文の場合、Xが「百姓」、Yが「天」に該当するから、「以^二百姓^一為^レ天^ト」となる。だから正解は(ウ)。

(イ)・(エ)は、返り点の付け方自体が誤っている。

このような場合は、選択肢同士を較べるよりも、自分で訓点を付けてみて、それと同じものを選ぶ方が早い。

問4 漢語の意味を問う問題。

(c)について。「与」は、複数の意味・読み方を持つ多義語の代表。ここでは、直後に指示語「之」が来ていて、その後の「輔^レ之」と、同じ構造をとっているから、「与」も動詞で読むことがわかる。したがって(ウ)「味方する」か(エ)「さすける」のどちらか

になるわけだが、「何を」さずけるのか、文中から読み取ることができない。さらに、直後の「之」の指示内容は、「与」の主語が「百姓」であることから、「王者」と考えられる。すると、「百姓が王者に味方する」とした方がより意味が通じる。したがって(ウ)が正解。

「与」が、(ア)「……だなあ」の意味になるのは、文末に付く(終)助詞の場合である。この場合は、「かな」あるいは「や」と訓読する。(オ)「いっしょに」の意味は、「ともニ」という読み方と対応するが、この場合は副詞で、動詞の前に置かれる。(イ)「……と……とは」の意味ならば、接続語で、「と」と読む。(ウ)「味方する」の意味ならば「くみス」と、(エ)「さずける」の意味ならば「あたフ」と訓読する。

(e) について。(e)を含む一文の構造が、「(百姓)○_レ之、則□」という繰り返しになっていることに着眼しよう。その上で、「与_レ之」「輔_レ之」「倍_レ之」の「与」「輔」「倍」がそれぞれ動詞だから、「非_レ之」の「非」も動詞だと見抜くことがポイント。ここから、否定詞と解釈する、(イ)「……なしでは」と(ウ)「……でない」は×。また(ア)「悪い」だと形容詞、(エ)「まちがい」だと名詞になるから共に×。動詞として読めるのは、(オ)「是認しない」しかない。

問5 指示語の内容を問う問題。この問題は、問2のC・D、問4の(c)・(e)とも関連する。

(d) について。(d)は「之ヲ」と目的語であり、この直上にある「輔」の主語は「百姓」である。そこで、空欄Cが「王者」とわかっていられることを前提にすれば、この部分は、「百姓」が「之」に「輔」という行動を取ると、「王者強」という状態となると言っているのである。したがって、この「之」には、「王者」が該当しよう。「輔」は、「たすく」という読み方もわかるが、「補佐する」「支援する」の意味である。この語は、多くの人間がより少ない人間に、場合によっては一人に対する際に使われるのがふつうである。ここからも、やはり、「王者」が適当とわかるだろう。

(f) は、この文が「(百姓)○_レ之、則(王者)□」の繰り返しであることから、やはり(ア)「王者」しかない。○にあたる「与」「輔」「非」「倍」の主語はいずれも「百姓」であり、□にあたる「安」「強」「危」「亡」の主語はいずれも「王者」なのである。したがって、「之」の指示内容も、すべて「王者」になる。

《補充問題》

現代語訳

問1

- (1) 今、時代は平和で実りは豊かである。どうして苦しんでいて楽しまないのか。
 (2) うわべを繕う者は、どうして国家を治められようか、いや治められない。
 (3) 奇才と敏捷博識ぶりは、どうして彼に続く者がいようか、いやいない。

問2

(略) 左記「解答」参照のこと。

解答

問1

- (1) 今時和し歳豊なり。何ぞ苦しみて楽しまざる。
 (2) 偽を為す者、悪くんぞ能く国家を治めん。
 (3) 奇才博敏、安くんぞ之に継ぐ有らんや。

問2

- (1) (i) 百獸の我を見て敢て走らざらんや。
 (ii) 百獸が私を見てどうして逃げないことがあるか、いや、みな逃げる。
 (2) (i) 嗚呼、六国を滅ぼす者は、六国なり。
 (ii) ああ、六国を滅ぼすものは、(敵の秦ではなく) 六国(自ら) なんだなあ。
 (3) (i) 公孫衍・張儀(は)、豈に誠の大丈夫ならずや。
 (ii) 公孫衍と張儀は、なんと真の優れた人物ではないか。

出典：胡震亨『唐詩談叢』／東京大学・前期日程・94年

書き下し文

唐に殷安なる者有り。嘗て其の子堪の宰相と為るを諱ひて曰はく、「汝は肥頭大面にして、今古を識らず、嚙食して意智無し。宰相と作らずして何ぞや」と。我謂へらく、肥頭大面にして、能く嚙食するは、猶ほ盛時には福氣有るの宰相なり。末世のごときは、只だ「無意智不識今古」の七字のみ、宰相と作るに足ると。記すあり、僖・昭の時、白衫の拳子有り、乞ひて市に歌ひて云ふ、
 板を執り高歌して箇の錢を乞ふ
 塵中に流浪して且に縁に随はんとす
 直饒老に到るまで長く此のごときも
 猶ほ勝る危時に化権を弄するに
 嗟呼、白衫の拳子をして寧ろ乞巧と為るとも、宰相と為る無からんとせしめば、天下安んぞ亡びざるを得んや。

現代語訳

唐に殷安という人がいた。以前その〔「殷安の」〕息子の堪が宰相になったのをからかって笑って言うことには、「おまえは太つていて頭と顔が大きくて、古今（の事情）を知らず、大食いで知恵がない。宰相にならなくてほかに何があるか〔「宰相以外になるものはない」〕と（言った）。私が思うには、太つていて頭と顔が大きくて、大食いができるのは、それでも（国情が）盛んな時には福（相を備えた）気のある宰相である。（だが）末世のような時（代）には、ただ「無意智不識今古」の七字だけで、宰相になるのに十分だ。（次のような）記録をしているものがある。（唐末の）僖（帝）・昭（帝）の時に、（読書人の普段着である）白い上着の科拳の受験勉強をしている書生がいて、物乞いをして市場で歌って言う、

板（という楽器）を手を持ち、高らかに歌って、一枚一枚の（僅かな）錢を恵んでもらう。

ごみごみとした世間にさすらい流れて、(前世の)縁にすがって(見知らぬ他人の恵みを請うて)いこうと思う。たとえ老(齢)になっってしまうまで長いことこのようであっても、

それでもやはりまさっているよ、(このような)危ない時代に政治権力を自在に操るよりも。

ああ、白い上着の書生に、むしろ物乞いになっても、宰相になることをやめようと思わせるならば、いったいぜんたい、どうして天下が滅びないだろうか(いや滅びてしまう)。

解答

問1 宰相にでもならなければ、他になるものはない。〔22字〕

問2 知恵もなく古今の事蹟もよく知らないような人。〔22字〕

問3 拍子木を打ち高歌して世間の人に錢を乞うて歩くこと。〔25字〕

問4 政治を志す人が宰相よりも物乞いのほうがましだと思っただけで政情が不安定だから。〔37字〕

書き下し文

惠盜宋の康王に見ゆ。蹠足警歎し、疾言して曰く、「寡人の説ぶ所の者は勇力なり。仁義を為す者を説はざるなり。客將に何を以てか寡人に教へんとする」と。惠盜対へて曰く、「臣此に道有り。人をして勇にして之を刺すと雖も入らず、力有りて之を撃つと雖も中らざらしむ。大王独り意無きか」と。宋王曰く、「善し。此寡人の聞かんと欲する所なり」と。惠盜曰く、「夫れ之を刺して入らず、之を撃ちて中らざるは、此猶ほ辱めあるなり。臣此に道有り。人をして勇有りと雖も敢へて刺さず、力有りと雖も敢へて撃たざらしむ。夫れ敢へてせざるは、其の志無きには非ざるなり。臣此に道有り。人をして本より其の志無からしむるなり。夫れ其の志無きは、未だ愛利の心有らざるなり。臣此に道あり。天下の丈夫女子をして驪然として皆愛利の心を欲せざること莫からしむ。此其れ勇にして力有るよりも賢れるなり。大王独り意無きか」と。宋王曰く、「此寡人の得んと欲する所なり」と。惠盜曰く「孔墨是のみ。孔丘・墨翟は、地無くして君と為り、官無くして長と為る。天下の丈夫女子頸を延べ踵を挙げて之を安利せんと願はざる者莫し。今大王は万乗の主なり。誠に其の志有らば、則ち四境の内、皆其の利を得ん。此孔墨よりも賢れること遠し」と。宋王以て応ふる無し。惠盜出づ。宋王左右に謂ひて曰く「弁なるかな、客の説を以て寡人に勝てるなり」と。

現代語訳

惠盜が宋の康王にお会いした。(康王は)足踏みと咳払いをしつつ、早口で言うには、「私が好むのは勇猛さと力である。(孔子・孟子の唱えるような)仁・義(などという小理屈)を考える(「言う」者は好まないのだ。客人よ、どういうことで私に教え(を垂れ)ようとするのか」と。惠盜が答えて言うには、「私はここに方法を持っています(「良い方法があります」)。(それは)人に、(たとえその人が)勇猛で(刃物で)王を刺したとしても刺さらなくさせ、(たとえその人に)力があって王を撃つたとしても当らなくさせます。大王(「康王」)は(それを聞いてみたいという)気持ちはありませんか」と。宋の王(「康王」)が言うには、「良いだろう。それこそ私の聞きたいと思っていたことだ」と。(そこで)惠盜が言うには、「そもそも王を刺しても刺さらず、王を撃つても当らないというの

は、これはやはり（相手に攻撃されるといふ）侮辱がある状態です。（そこで）私はここに方法を持っています（「良い方法がありません」）。（それは）人に、（たとえその人が）勇猛であったとしても決して刺さないようにさせ、（たとえその人に）力があつたとしても決して撃たないようにさせます。（しかし）そもそも『決してやらない』というのは、その意志（「王を攻撃する意志」）がないということではありません。（そこで）私はここに方法を持っています（「良い方法があります」）。（それは）人に、はじめからその意志をなくさせます。（しかし）そもそもそういう意志がない（状態）はまだ（王を）愛し（王に）利を与える心を持っていないということです。（そこで）私はここに方法を持っています（「良い方法があります」）。（それは）天下の男女に、喜んで皆（王を）愛し（王に）利を与えようという心を欲しないことがない（「すすんで王を愛し、利を与えようと欲する」ようにします。これは（単に）勇猛さと力を持つつより（民に敬愛されるという点で）優っています。大王（「康王」）は（それを聞いてみたいという）気持ちはありませんか」と。宋の王（「康王」）が言うには、「それこそ私が手に入れたかと思つてゐる（状態の）ことだ」と。（すると）恵盎が言うには、「孔子・墨子がそれです（「そういう状態を手に入れた人です」）。孔丘（「孔子の本名」と墨翟（「墨子の本名」）は、（支配する）地もない状態で君主となり、官職にも就かずに（人の上に立つ）長となりました。満天下の男も女も、首を延ばし踵を挙げ（「爪先で立つ」（るように孔丘・墨翟が来てくれるように待ち望み）、（孔丘・墨翟を）安んじ利を与えようと願わないものはいませんでした。ところで大王は戦車を一万台持つような大国の主で、（つまり支配する地も官職もなかった孔丘・墨翟よりすでにその点で上です。実にその志（「孔丘・墨翟のような仁義を行う志」）があれば、広大な領土の中、すべてそのような利（「孔丘・墨翟が得たような、人民に敬愛される利」）を得るでしょう。（すでにして孔丘・墨翟よりも優った点があるのですから）そのようなれば、孔丘・墨翟より優ることは、（はるかに）遠いでしょう（「孔丘・墨翟よりはるかに優ることになるでしょう）」と。宋の王（「康王」）は返す言葉がなかった。恵盎は帰つてしまった。宋の王（「康王」）が左右（の侍臣）に向つて言うには、「弁舌（の立つ男）であるなあ。あの男は弁舌でもつて私に勝つてしまった（「私をやりこめてしまった）」と。

解答

問1 a ㊦なにをもつてか b ㊦こたへて c ㊦ひとり d ㊦のみ e ㊦もつてこたふる(こと)なし

問2 攻撃しないからといって、攻撃の意志そのものがないということにはならないということ。

問3 世の男女すべてに、喜んで康王(大王)を愛し、利益を与えようとししない者(こと)はないようにさせる。

問4 天下の丈夫女子頸を延べ(延ばし)踵を挙げて之を安利せんと願はざる者莫し。

問5 惠盎の弁舌に乗せられて、嫌いな仁政が最善であると認めざるをえない結果となつてしまったから。

／話に乗っていったら、自分が好む力による支配より、好まない仁義による政治のほうが優れているということになってしまったから。〔別解〕

解説

問1 基本的な語句の読みの問題。

a 「何以」は「なにをもつてか」と訓じ、「原因・理由(どうして・なぜ)」を問う場合と、「手段・方法(どうやって・何を使って)」を問う場合とがある。「以」は前置詞で、一般に目的語を伴って「以―A(目的語、省略される場合もある)―述語動詞(―補語)」の形で述語の前に倒置される。ただし、倒置される目的語が「何」などの疑問代名詞の場合は、「以」と疑問代名詞が倒置され、「疑問代名詞―以」の形になる。つまり、「何以」は「以何―述語動詞」の「以」と「何」が倒置された形である。この「何」が「どういう原因・理由か」の場合は「どういう理由(原因)をもって」という意味になり、「どういう手段・方法か」の場合は「どういう手段(方法)をもって」の意味となる。

b 「対」という字は、「たいす(向き合う)」「たい・つい(相手)」などの訓を持っているが、ある会話に対する答えを言う場合にも用いられ、その場合は「こたふ(答える)」と訓ずる。

c 「独」が副詞の位置にあるときには「ひとり（ののみ）」と訓じて限定を示す。他には「僅・纒（わづかにののみ）」「惟・唯・徒・只・但・直・特（ただののみ）」などが、限定の副詞としての機能を持っている字。知らないものがあつたら覚えておいたほうがよい。

なお、一般にはこれらの字に修飾される語句に「のみ」という限定の副助詞を補って訓読するが、本文では「大王独り意無きか」と、「のみ」を使わない訓読になっている。どうしてかという点、日本語の限定の副助詞には、たとえば「くするの私だけ（つまり他の人はくしない）」のように、他の存在について類推させる機能があり、「大王独り意無きのみか」などと訓ずると、他に何か類推の対象があるか（つまり「意志がないだけで他の何かはある」ということ）のようになってしまふからである。このような場合は「のみ」を用いないこともある。漢文訓読は「翻訳」である。したがって、「暗記」した「公式」通りではないこともあり得ることを知っておけばよいだろう。

d これまた限定の形だが、「已」「耳」「爾」「而已」「而已矣」などは「のみ」と訓ずる文末の限定表現。

e 「無」が述語動詞で「以応」がそれに対する目的語句として体言に相当することがポイント。もちろんその前提として、長々と自説を述べた恵盎に対して、宋の康王が「無以応」とあり、そのまま恵盎が「出」、つまり帰ってしまった、という前後の内容にも注意。当然康王が恵盎に対して「答えられなかった」ぐらいの意味となるはずである。すると、「以応」は「以」が前置詞、「応」が動詞という形——「以」とともに動詞「応」の前に倒置されているはずの目的語が省略された形（問1aの解説も参照）——で、その句を「無」が否定していると考えられる。したがって「以応」は「以て応ふ」だが、この句は「無」に返って訓ずる体言相当句なので、「以て応ふる（こと）」と、動詞「応」を連体形「応ふる」で訓ずることとなる。

なお、「無」は「有」の対義語で、たとえば「所有」という語があるように、「有」は本来的には「持っている」という意味の字。「無」も「持っていない」が基本の意味である。したがって、この部分を基本の意味どおり逐語訳すると、「（宋の康王は恵盎の理屈に対して）応えるのに使える理屈を持っていなかった」となる。

問2

設問の指示通り、何を「敢へてせず」なのか、「其志」の「其」が指す対象を冷静に考えれば難しくはない。設問部は恵盎の会話文の中にあり、その会話文が何か言う度に「臣有道於此（私はここに良い方法を持っています）」を用いて説を展開していることに気付けば簡単。「夫刺之猶辱也（刺しても刺さらず、撃つても当たらないだけでは攻撃されるといふ点で屈辱）」——そこで

良い方法があります——「使人雖く不敢撃（人に攻撃されないようにする）」「夫弗敢く其志也（設問部）」——そこで良い方法があります——「使人本く其志也（はじめから攻撃する意志を持たせないようにする）」「夫無其く之心也（攻撃する意志が無いだけでは王を愛するということにはならない）」——そこで良い方法があります——「使天下く利之心（すべての男女が王を愛するようにする）」——「此其賢く無意邪（そうなれば力で抑えるよりよい状態になる。興味がありませんか）」、という展開なのだから、設問部で言う「弗敢」は「攻撃されない」という状態である。そして、続く「臣有道於此」の次の内容「攻撃の意志を持たないようにする」から、「其志」は「攻撃の意志」ぐらいの内容と判断できる。あとは「非無」の二重否定の形であることに注意。否定の対象が「其志（攻撃の意志）」なので、「攻撃の意志が無いわけではない」つまり「攻撃の意志がある場合もある」ということになる。

問3 設問部は問2と同じ会話文の中にあるので、問2で見た会話文全体の論の展開を前提に考える。「使（述語動詞）——A（実質動作主）——B（実質動作）」の構文で、A（実質動作主）にあたるのが「天下丈夫女子」、B（実質動作）にあたるのが「莫不驩然皆欲愛利之心」の部分である。問題はB（実質動作）の部分が「莫不——述語動詞」という二重否定の動詞句になっている点だが、整理して考えれば簡単。附せられた訓点から考えても、この部分の述語動詞は「欲」である。「驩然」「皆」が述語動詞「欲」に対して副詞の位置にあり、「愛利之心」は目的語・補語の位置にある。したがって「莫不驩然皆欲愛利之心」は「愛利の心を欲しないことはない」イコール「愛利の心を欲する」で、それを「喜んで皆」という副詞が修飾していることとなる。これが「使AB」のB（実質動作）の内容なので、あとは「A（天下の男女—実質動作主）にBさせる」の形にあてはめて訳し、「愛利之心」が誰に對するもので、具体的にその對象についてどうする心なのか、を考えて自然な日本語表現にすればよい。ちなみに、設問では「口語訳」を要求しているので、「意訳（この場合は『愛利の心を欲する』）」より「逐語訳（この場合は『愛利の心を欲しないことはない』）」を尊重した表現で訳すほうが望ましい。

問4 設問文にこの部分の大意が示され、本文にも返り点が施されているのだから、それを参考に構文を見ていけばよい。設問文にある「二人を安らげ利益を与えようと願った」が、「願安利之者」および「願」から返る「不」と「者」から返る「莫」の部分に對応することに注意。述語動詞「願」と否定詞「不」「莫」の組み合わせで「願った」という意味になるのだから、二重否定で「願

はざる者莫し」となるはずである。この「願」という述語動詞に対する目的語・補語句が「安利之」で、意味は「二人を安らげ利益を与えよう」なので、「之」が「二人」に対応する指示代名詞であり、「安利」が「安らげ利益を与えよう」という動詞句となる。したがって、「莫」「不」「願安利之者」で、「之を安利せんと願はざる者莫し」となり、ここまでできれば後は簡単。「延頸拳踵」が「孔丘・墨翟が自分のところに来てくれるのを待ち望み」に対応する部分である。「延頸」は、日本語でも「首を長くして待つ」という表現があるように、何かの実現を待ち望むときの慣用的表現。漢文では「拳踵（つまり爪先立ちをして早く実現してほしいと期待して待つ）」と一緒によく用いられる表現なので、覚えておいて損はない。なお、「者」という字は少々注意が必要。日本語では専ら人を意味する代名詞として用いられるが、漢文では物や事柄を意味することも、日本語でいう形式名詞として機能することもあり、訓読も「もの」だけではなく係助詞の「は」と訓ずることもある。

問5

本文全体の展開を踏まえていけば、問題なく答えられる。惠盎が康王のもとへ行き、自説を展開するわけだが、最初に康王が「寡人所く仁義者（私が好むのは『勇力』であり、『仁義』は好まない）」といていた点に注意。問2の解説で見たように、「勇力」による攻撃が無効になる方法がある↓それでも攻撃されるといふ屈辱を受ける↓攻撃されない方法がある↓それでも攻撃されないというだけで攻撃の意志があるかもしれない↓攻撃の意志を持たせない方法がある↓意志がないだけでは王を愛するということにはならない↓人民が王を愛するようにさせる方法がある↓それが孔丘・墨翟の方法つまり「仁義」である、という惠盎の論理によって、康王は「無以応（返す言葉がなかった）」という状態になってしまった。それについての康王の感想が「弁矣（設問部）、客之以説勝寡人也（客「惠盎」は説で私に勝った）」という会話文。したがって、何がどう「弁矣（雄弁）」なのかといえば、惠盎が巧みに論理を操って康王の好む「勇力」より、嫌いな「仁義」のほうが優れているという結論に持っていく、自分がそれに反論できなくなってしまうことである。設問はなぜ康王が惠盎を雄弁だと思ったのかを聞いているので、結果として嫌いな「仁義」を認めさせられたことがその理由となる。

《補充問題》

現代語訳……(略) ※問1・問2ともテキスト参照のこと

解答

問1 1 || 忠孝の道は安くんぞ両全を得んや。

2 || 哀公問ふ、孰か学を好むと爲すと。

3 || 安くんぞ能く信の王を禁ぜんや。

4 || 安くにか能く信の王を禁ずる。

5 || 其れ王の好まざるを如何せん。

6 || 吾籤ひて之を決せんと欲す、何如。

問2

1 || 割レ鶏焉 用ニ牛刀一。

2 || 燕雀安 知ニ鴻鵠志一哉。

3 || 百獸之見レ我而敢 不走乎。

4 || 学 而時習レ之、不 亦説一乎。

●
メ
モ
●

【問題】(演習)

出典：中村雄二郎『術語集』／神戸大学

文章略解

遊びは、真面目・労働・有効性という日常的なものとの対比で、非日常的な演劇や祝祭と繋がる。遊びの特徴の一つは、これは遊びだというメッセージを示し合っていることである。これは、遊びそのものを異化する眼を含んでいる。もう一つは、自由な活動だということだ。演劇において、遊びの精神は不可欠であり、最も意識的構造的に現れる。他方祝祭は、演劇の街頭化と言える。今日、これらが商業主義化、惰性化する危険も大きい。

解答

問1 (ア) 余裕 (イ) 無邪気 (ウ) 拘束力 (エ) 不可欠 (オ) 転倒

問2 真面目・有効性

問3 規則

問4 発言者がクレタ島人である以上、発言内容が正しければ発言そのものを否定し発言が正しければ発言内容を否定することになるから。〔59字〕

問5 理性のあり方が、理論的なものに限定されず、人間の根源的な生と自由とを体现する、遊びや演劇に結びついているということ。

[58字]

問6 祝祭

問7 遊び(の非日常性)

文章略解

「ロゴス」とは本来的に「集積し、多種多様なものを分類・整理する」ことである。ものに名称を付け分類整理することによって森羅万象は人間にとってはじめて意味のある存在となり、それによって人間はじめて対象を認識し把握できるようになる。したがって言葉は存在そのものでもある。そして、言葉によって周囲の森羅万象を分節することは、同時に人間が世界の中で自らの占める位置を理解することでもある。

解答

問1 物自体としてはまったく異質な私の「脚」とテーブルの「脚」が、ともに「脚」と名づけられることで、それまでなかった一つのカテゴリとして存在し始め、この世界の中で意味あるものとして、初めて位置づけられること。(102字)

問2 命名にはそれまで存在しなかった対象を生み出す根源的作用があるから、太陽神がもつ全能の力の源もその本名にある。そのため、ラーは本名をひた隠しに隠していたが、それを知られてしまって、力を失ってしまった、ということ。(105字)

問3 「動物」や「昆虫」はそれ自体が具体的に存在するのではなく、「犬」と「狸」あるいは「蝶々」と「蛾」を括る集合を意味する上位概念であるが、それを使用して、「犬」と「狸」、「蝶々」と「蛾」を各々一つのカテゴリに包括すること。(109字)

問4 それ自体は混沌として区切りのない世界が、命名によって初めて分節され、存在し始めるが、それがいったん存在し始めると同時に人間の認識そのものがそれに規定されていく、ということ。(86字)

問1 「有意味化」と「根源的な存在喚起力」の説明がポイント。解法の根本は、「くだいて言えば」の後ろに注目。そこにある「カテゴリーに括」ることが、傍線部と同義。その「カテゴリー」をたどって、第二・三段落に着目する。同時に「根源的作用」という第七段落にも目を配る。

解答には、設問条件に「参照しつつ」とある以上、参照したことを証拠に残すことが肝心。「脚」という語の登場が必須。ただし、まる写しにしているようでは策がない。物そのものとしては一切共通性のないものが、同一名称で呼ばれることでカテゴリー化する、そのプロセスが、言及されていること。また、「意味」の説明、あるいは少なくともそれへの言及と、「喚起」するのだから、「それまでなかったもの」を生み出すニュアンスとが欲しい。そして、「根源的」である以上、それが全ての出发点である旨の説明も欠かせない。

問2 第七段落の趣旨に沿って、ラーの逸話を説明し直す問題。他の問に比べて格段に易しいはずである。

解答には、第七段落の趣旨が含まれており、神話のあらすじを要領よく紹介してあること。

ただし、最も肝心なのは、解答例でいうと「太陽神がもつ全能の力の源もその本名にある。そのため、」に相当する部分。つまり、第七段落の趣旨と神話の接続部。ここは、直接には課題文中に言及がないが、これを推測していないとお話にならない。

問3 「メタ的レベル」という表現の意味を問う問題。

「それ自体は実在しない、ただの名称」、「上位概念」「クラス名」「集合名」といった表現ができるだろう。残りは同義反復的説明で可。

問4 「世界の差異化」は、「ロゴス化」と同義。第八段落の、特に後半部に着目することが肝要。「差異化」と「分節」との密接な関係に気づけるかどうか、そこが読解の第一歩である。

一方、「意識の差異化」は、ポンティの発言。命名することで認識が始まるのである。

ただし、これら両者は同時に生じる相互作用。「相互作用」であること自体、ポンティの発言には言及されているが、このから

みがなかなか理解されないので、筆者は敢えて、ここで今一度「相互作用」なるだめ押しを試みている。したがって、その含みをしつこいまでに表現することが必要である。

【問題】(演習)

出典：大岡信『詩・ことば・人間』／上智大学

文章略解

言葉の修得は、単に意思の伝達手段の修得にとどまらず、一人の人間の人格全体の問題に関わる。言葉は発語の深層構造をなす人格全体を伝達するからである。言葉修得以前の子供にとっては、ある感情は未分化な全身的衝動にすぎない。言葉が与えられて初めて、感情は明瞭に自覚されるようになる。してみると、貧弱な言語教育は貧弱な人間を必然的につくりあげる。言葉が人格的現象であることを自覚しない限り、言語教育も成果を上げることができないだろう。

解答

問1 あ 8 い 2 う 7 え 3 問2 1 B 2 A 3 A 4 B

問3 b 2 c 3 問4 2 問5 1 問6 1

問7 1 A 2 A 3 B 4 B

出典：粟津則雄『解体と表現』現代文学論』／ 東京大学・75年

文章略解

日常の言語では、文章は、一種の記号として、読む者を事実の総体としての現実に運ぶ。この点に、小説の言語との間の一つの根本的な相違がある。言語の背後の事実への無知。小説では、これが一つの本質的要素として存続し続ける。小説の言語は、我々がその対象に対して己の生の力で対処し反応することを拒む。読む力によって初めて接しうるような世界に、人物や事物を、その不透明な堅固さでも言うべき性質を通して現存させる。

解答

問1 1 問2 3

問3 2 問4 5

解説

問1 「このような」という指示語の受ける内容は、比較的わかりやすい。「このような類似性のために、人びとは、日常の言語と小説の言語とを、しばしば同一視することになる……」とあることから、この「類似性」は「日常の言語と小説の言語と」に関わることとがわかる。それを踏まえて、傍線部A直前の「そして」で受けられる箇所を見てみると、「同じ文章を、『城』のなかで読んだ場合はどうかというと、その場合も、われわれが、文章そのものではなく、文章がさし示すものへ向かうという点では、何の相違もないようだ。」と書いてある。「文章がさし示すものへ向かう」というこの箇所からだけでも、1が導かれるだろう。

更に26行目からの「われわれが知りつくしているこの『局長』ということだが、小説のなかに置かれたとき、この場合もやはり、このことばは、日常言語と同様、局長という対象をさし示してはいるが、われわれは、この『局長』を、姿かたちやなすべき報告

についての想起や用件に関する疑問のなかに解消することは出来ないのである。」の部分から、2・4の選択肢は「日常言語」にのみ言えることであって誤りとなる。3の「対応関係」は、これだけでは何と何との対応関係か、よくわからない。たとえ「文章と、それが指示する対象との対応関係」であるとしても、「小説の言語」は対象を指示するだけで、そこに対応物をもたないのである。

問2 傍線部イを含む一文直後の一文「なぜなら、小説においては、局長は、この『局長』ということばが発せられたのちに、はじめて存在するものであるからだ。」から、3であることが明らか。1・2・4の選択肢のような内容のことは、本文で話題となっていない。

問3 問2の解説で挙げた「小説においては、局長は、この『局長』ということばが発せられたのちに、はじめて存在するものである」と対比させる形で、その直後に「現実の世界においては、……」とくる。「われわれは、『局長』ということばにたいして、あらかじめ存在している局長の姿かたちや、彼になすべき報告を思い起せばよい。あるいはまた、『何の用事だろう』という疑問を抱けばよい。かくして、これらの想起や疑問のなかに、局長という存在を解消すればよい。」この部分が、最初の根拠となる。なぜならば、空欄ウは、「小説の言語」についての説明箇所が出てくるが、「のではなく」と否定されている以上、空欄ウには、対立項であるこの「現実の世界において」の内容が入ることになるからである。

この後、「ところが」という逆接の接続詞によって「われわれが知りつくしているこの『局長』ということばが、小説のなかに置かれたとき、……」の方に話題が転換する。したがって、ここで否定されている記述箇所^①に直目する。すなわち、「われわれは、この『局長』を、姿かたちやなすべき報告についての想起や用件に関する疑問のなかに解消することは出来ないのである。」や「すなわち、このことばは、(たしかに局長をさし示しはするものの、)そのことよって現実の局長のなかに消え去ることはない。」などである。これが「ウ」のではなく、「ウ」のウではなく、「ウ」と対応する。これが、第二の根拠箇所である。

最後に「ウ」のではなく、『局長』という、言語にして本質なるものが現存するのである。」という、否定肯定の関係に注目してほしい。「言語にして本質なるものが現存する」と反対の内容を考えるのである。

問4 消去法でいく。

1. 「前者（＝小説の言語）が記号としての機能を喪失し」が、問1でも見た、小説の言語と日常の言語との類似性に関する記述に反する。
2. 「言語を超えた対象に読者を運ぶ象徴性」の箇所が誤り。本文に書かれていない。
3. 「現実の存在によってつねに相対化される」とか「観念の肉化」だとか、ましてそれが「はなはだ不完全にしかな成し得ない。」だとか、そんなことは話題になっていない。
4. 「口語としての共通点」など話題になっていないし、「文章語としての」も余計。
5. 26行目「われわれが知りつくしているこの『局長』ということばが、小説のなかに置かれたとき、……」以降の「……てはいるが、……ことは出来ないのである。すなわち、……するものの、……ことはない。」という否定肯定の表現箇所合致する。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--